

トキタラ文における評価的意味の歴史

—近世・近代における「ト+来る」表現を中心に—

高谷由貴（京都橘大学）

takaya-y@tachibana-u.ac.jp

1. はじめに

本発表は助詞「と」に動詞「来る」のタラ形式が後接した「トキタラ」という形式が用いられる表現についての歴史の変遷を扱う。

現代語において、助詞トと動詞「来る」のタラ形式からなる「トキタラ」は提題の一種として扱われ、名詞を提示する(1) aのような「トキタラ」は、「評価的意味」を帯びて語句を提示するという分析がなされている(岩男 2019, 2021 等)。このような表現は近世期から見られる(1) b。しかし、歴史的な分析は活発に行われているとはいえない。

(1) a. 人間が脳を使ってやることときたら、ひどい間違いを次々に犯すことなんだから… (BCCWJ/月に歌うクジラ) (岩男 2021 : 106)

b. おいらが宅の母人ときちやあもう／＼たまらねへよ (春色梅兒譽美/1832-1833/おれの家の母親ときたら)

本発表では、このような「トキタラ」を含む「ト」+「来る」からなる表現について、近世・近代における使用を中心に調査を行う。

まず2節で現代語の「トキタラ」の用法についての先行研究を見ていき、本稿で対象とする形式を限定する。3節で調査について、使用言語資料と調査方法を示す。4節で近世・近代における「トキタラ」の具体例を見ていく。5節はまとめと今後の課題である。

2. 先行研究と問題設定

本節では、「トキタラ」に関する先行研究を概観し、残された課題を確認する。当該形式の江戸語における研究については湯澤 (1957:207) があるが、歴史の変遷については活発に議論されているとはいえない状況のため、ま

ず、現代語における「トキタラ」の特徴に関する指摘を見ていき、本稿の考察対象を定めたい。

岩男（2014, 2019, 2021）は「トキタラ」が用いられる表現に次の3つがあるとした。その3つとは「行為の接近」「認識の接近」そして「主題」である。以下でこれらの文法的な差異を確認していく。その上で、本発表では、これらの3つを全て調査の対象とする。

2.1 行為の接近

「行為の接近」とは、相手の発話や行為が接近した／向けられたという意味になるものである。(2)は発話が話者に向けられたことを表し、(3)では行為が「久保」に向けられたことを表す。

(2) 今後「NSインターナショナル…」と来たら、その瞬間に「二次勧誘お断りだ！（ガチャン!）」と言う態度をとりましょう。

(3) 久保は、後手が△7四歩ときたらどうするか。それを常に警戒しながら駒組みを進めている。

これらの「トキタラ」は、「来る」本来の「空間的に接近した」という意味が残されている。その証左として、動作主「後手」の共起や、「くる（きた）」と活用して述部で使用することが可能であることが指摘されている（岩男 2019 : 153）。

(3)' 後手が△7四歩ときた。

2.2 認識の接近

「認識の接近」とは、「トキタラ」の前接部に複数の要素が並び、それを受けて話者が連想する事物を述部で述べるものである（岩男 2019 : 154）。

「来る」の空間的な接近の意味が、時間的・認識的な意味へと拡張したものであり、前接部において、話し手の認識・思考がある特定の時点に接近していることを意味するとされる。(4)は、「高橋」「松井」の順に認識が発話時へと接近している。

(4) プロ野球チームの選手の画像について

なぜ清原がないのかってなー，確認とったほうがいいよねー。ねー，なんでいないのーと。4番打者がなぜいない。普通，高橋，松井ときたら，次は清原だろー。

この「トキタラ」は述部において「とくる（きた）」という形で活用させることができるが、「行為の接近」とは異なり，動作主が共起できない。

(4)' 高橋，松井ときた。

*私が高橋，松井ときたら，次は清原だろー¹。

2.3 「主題」の提示

「主題」の提示とは、「トキタラ」に前接する語句に言及したものである。(5)は「イギリスのビール」について「水みたいな味もそっけもないしろもの」と述べている。この用法の場合は、「来る」が活用して述語で用いられることはない。また、「来る」の動作主の共起が容認されることもない(岩男 2019: 158)。

(5) スコッチの本場のことゆえ，たとえ場末のパブであつてもウイスキー類はまあまあの味であつたが，その時代のイギリスのビールときたら，アルコール度数も低くそれはまるで水みたいな味もそっけもないしろものだった。

(5)' *その時代のイギリスのビールときた。

*私がその時代のイギリスのビールときたら…

先行研究では、「主題」の提示について，語句を何らかの評価的な意味をもって提示する表現だとされ，その評価はマイナスが多いとされる。

(6) 不満・非難・自嘲などの持ちがこめられる(森田・松木 1989:53)

(7) 評価は批判的なものや，マイナスの評価であることが多く，文には話し手の嘆きや憤慨，あきれの気持ちなどがこめられていることが多い。(日本語記述文法研究会：2009)

ここまで，先行研究で示された「行為の接近」「認識の接近」「主題」3つについて述べた。これらの文法的特徴をまとめると次のようになる。「行為の接

¹ *は容認が難しいことを示す。

近」「認識の接近」「主題の提示」の順番で動詞「来る」の本来の空間的接近の意味から遠くなる。

表 1 先行研究におけるトキタラの用法（岩男 2019 を参考に発表者が作成）

用法/特徴	述部で「来る」に活用可能	動作主が生起可能
行為の接近	○	○
認識の接近	○	×
主題の提示	×	×

以上が、本発表の注目する先行研究の指摘である。本発表では、先行研究では明らかになっていないこれらの用法の歴史的変遷について調査する。

3. 調査

3.1 調査対象と調査資料

調査では、先行研究で指摘された「トキタラ」の各用法の歴史的変遷を明らかにし、用法の分類についても検討していく。

調査対象とする形式は、「と」と「来る」からなる諸形式とする。「トキタラ」以外にも「トキテハ」「トクルト」等の形も含めて調査する。「行為の接近」「認識の接近」には、ひとまとまりの複合形式として働く (3) (4) のような例の他に、「来る」が述部で使用される (3)' (4)' のような場合もある (藤田 2000 : 438, 岩男 2019 : 156–157)。それぞれを分けて計上する。

- ① ひとまとまりの複合形式として働くもの [複合用法]
- ② 「来る」が言い切り・中止などの形で、述部で使用されるもの [述部用法]

なお、文脈から「来る」の動作主が特定され、空間的に接近する文意が明確である (8) のような例は、動詞「来る」の本来の使用であるとして用例から除く。

(8) そのよふにいやがるものを、べん／＼ときたは、おれが罪だつけよ。

(傾城買二筋道/1798/そのように嫌がるものを、だらだらと来たのは)
調査対象の資料については、近世中期～近代の話し言葉を反映した資料を

対象とする。辞書による初出例が 1770 年代のものであり、江戸語の資料²によるものであることから、近世中期・後期以降の江戸・東京語の資料を中心に調査を行った。使用言語資料の概略を示すと、表 2 のとおりである。

表 2 使用言語資料の概略

近世中期	明和－安永期 1770－1780 頃	黄表紙 洒落本	・金々先生栄花夢 ・遊子方言/辰巳園 + CHJ ³ 所収の洒落本 2 作品
近世後期 I	寛政－文化期 1800 頃	滑稽本 洒落本	・東海道中膝栗毛/浮世風呂 ・傾城買四十八手/傾城買二筋道+CHJ 所収の洒落本 1 作品
近世後期 II	文政－天保期 1820－1830 頃	人情本	・CHJ 所収の春色梅児誉美/春色辰巳園/仮名文章娘 節用
幕末－ 明治初期	1860－1870 頃	滑稽本	・CHJ 所収の安愚楽鍋
明治期	1890－1910 頃	落語 小説	・CHJ 所収の東京落語 ・CHJ 所収の口語体の文芸作品（江戸・東京出身者による）

調査結果の概略を、「表 3 トキタラの用法別使用数」に示す。

結果を簡単に確認しておこう。2 節において、「行為の接近」「認識の接近」「主題の提示」の順番で、動詞「来る」が本来持っている、空間的接近の意味から遠くなると述べた。「来る」本来の意味を最も保持している「行為の接近」の例が、各用法の中で出現が比較的遅く、近世後期に 1 例見られ、それ以外は明治期から見られる事が注目される。

「認識の接近」については、近世中期・後期にかけて述部用法が複合用法より多く見られる。

² * 咄本・鹿の子餅〔1772〕野等息子「いがみの権（ごん）と来（キ）て居る息子」
* 洒落本・辰巳之園〔1770〕「豊岡が拳ときは、凄ひもんだ」くる【来】，日本国語大辞典，JapanKnowledge，<https://japanknowledge.com>，（参照 2023-03-03）

³ 国立国語研究所（2022）『日本語歴史コーパス』

また、「主題」は全ての時代の言語資料に確認された。次の節で実際の例について見ていこう。

表 3 トキタラの用法別使用数

形式/時代	行為の接近		認識の接近		主題	合計
	複合	述部	複合	述部	複合	
近世中期				3	2	5
近世後期Ⅰ		1	1	7	3	12
近世後期Ⅱ			1		2	3
幕末－明治初期			1	3	1	5
明治－落語		9		1	2	12
明治－小説	1	1	2	1	7	12

4 近世・近代の江戸・東京におけるトキタラ

4.1 近世中期

近世中期までの用例は僅少であり、「行為の接近」の例は現れない。

「認識の接近」の例から確認しよう。(9)～(11)はいずれも「ときて居る」「ときておりやした」「ときていらあ」のような述部形式である。ある状態にあることを示したり(9)(10)、一連のまとまりをなす表現を複数受ける用例(11)が見られる。(9)(10)の前接部は「さつまやの源五兵衛＝にわか成金」「大のてれぼう」のように、何らかの程度が過剰な状態にあることを描写するものである。(11)は、侠客が親分について話す場面で、「鬼に金棒」「釈迦に提婆」という慣用表現を並べている。

[認識の接近・述部]

- (9) これはきびしい。さつまやの源五兵衛ときて居る。とんと梅が枝もどき。ありが／＼。(金々先生栄花夢/1775/これはたいしたことだ。さつまやの源五兵衛と来ている。ありがたいありがたい。)
- (10) さつきからあの評判で粕稽者大のてれぼうときておりやした(当世左様候/1776/粕芸者が大の照れ坊(間の悪い人)と来ておりました。)

(11) 親分がまたおいらがようにさけへのまつしやろうもんならそれこそ。鬼に金棒。しやかにでえばときていらあ

(俠者方言/1771/親分がまた俺たちのように酒をお飲みになろうものならそれこそ鬼に金棒，釈迦に提婆ときているわ)

(11)' おいらが/親分が鬼に金棒。しやかにでえばときていらあ

これらは、「来る」の動作主を想定することが難しい(11)'。この点で、本来の動詞としての使用から離れたものである。これらは話者の認識・思考を反映したものであると判断し「認識の接近」に計上した。(9)(10)は、1つの要素のみを受けける点で、現代語とは異なっている。

ある語句を取り上げる「主題」用法の例も見られた。(12)は「豊國が拳」に、(13)は「根」に、それぞれ言及しその程度の甚だしさを述べたものである。特定の語句に言及して、後件でその評価を述べる点は、現代語と同様である。

[主題・複合]

(12) お長 いつぞや，拳角力の時，出なさつたねエ。

お豊 それ／＼，梅の紋を付て。

如雷 豊國が拳ときては，凄ひもんだ。(辰巳之園/1770/豊國の拳ときたら，すごいものだ。)

(13) いままでならおふなら長うただ。おらあ劍烏帽子でも。鷺娘でもちどうでも。なんでもかでもおべへたがほんにまたなによりおもしれへの根ときていらあとんだことよ。(俠者方言/1771/何でもかんでも覚えたのが本当にまた何よりも面白さの根本ときているのはとんでもないことだ。)

(12)(13)の意味については、現代語の分析とは異なり、否定的評価に傾くといった特徴は特に見られない。(12)は角力の実力を褒める場面で使用される。長唄の面白さについて述べる(13)も否定的文脈とは考えにくい。

4.2 近世後期 I

近世後期になると「行為の接近」の例が1例見られた。(14)は動作主「先」が共起しており、述部で「…ときてある」と使用されている。「銭を出さねへ」

という行為が向けられた例と言えよう。

[行為の接近・述部]

- (14) ナンノ、癩病(かってへ)の瘡恨(かさうらみ)よ。今もいふ通り、
本っばやりの癖に、先が銭を出さねへときてゐるから、がんぎだア
ス(浮世風呂/1809-1813/先方が銭を出さないと来ているから)

「来ている」の形で述部に用いられ、ある状態にあることを示す「認識の接近」の例も中期に引き続き見られる(15)(16)。これらは「来る」の動作主を想定することはできない。近世中期までは、文末に現れる例(9)～(11)が見られたが、後期ではそれに加えて(15)(16)のように「ときてゐるから」の形で、後件につながっていく例も見られるようになった。

[認識の接近・述部]

- (15) お山「お縁さんがお色白ときてゐるから、夫婦揃つたところはしら
玉と金鰐焼をひとつ竹の皮に包んだといふもんだ(浮世風呂/1809-
1813/お縁さんがお色白と来ているから)
- (16) お撥さんのは、猫脊中ときてゐるから、鼠の糞のやうな垢がよれる
よ(浮世風呂/1809-1813/お撥さんは、猫背と来ているから)

一方(17)は、「認識の接近」の用法で「ときちあ」という複合形式が見られた唯一の例である。「ときちあ」に前接する「松かぜせんべい」と、「竹むらのもなかの月」が話者の認識の中で接近し、一組となっていることが示されている。このような複合形式の「認識の接近」の例が見られるのは近世後期以降である。

[認識の接近・複合]

- (17) こいつあありがてへゑちごやの松かぜせんべいときちあ竹むらの
もなかの月といふもんだ(仕懸文庫/1793/ありがたい。越後屋の松
風煎餅といえば竹村の最中というものだ。)

「主題」の例も見られた。ある語句に言及し、後件で評価を行う点で、(18)(19)は、近世中期に見られた例(12)(13)と同様である。「トキタラ」という形式が見られたのは今回の調査では近世後期からであった。

また、名詞ではなく「友達どもが集つた」という節を受ける(20)のような例が調査対象中では初めて見られた。否定的な評価の例(19)(20)だけで

なく、肯定的な評価も見られ (18)、大きな偏りは見られない。

[主題・複合]

- (18) 越後の雪ときたら大さうさネ (浮世風呂/1809-1813/越後の雪ときたら凄いなものだ)
- (19) 金神長五郎どんと、熱の白兵衛殿との立引なんぞときたら、ヘン、虚のやうだ。(浮世風呂/1809-1813/金神長五郎どんと、熱の白兵衛殿との意地の張り合いなどときたら、嘘のようだ。)
- (20) 友達どもが集つたときは踏込に下駄が重り合つて足の立端がねへだ。(浮世風呂/1809-1813/友達どもが集まったときは、入り口に下駄が重なり合つて)

4.3 近世後期Ⅱ

近世後期Ⅱにおいても、後期Ⅰの(17)のように、トキタラが受ける名詞と、それに続いて示される名詞が、話者の認識の中で一組となっている「認識の接近」の例が見られた。(21)では「山口巴」という引手茶屋と、「待乳山聖天」という寺院が一組となっていることが示されている。

[認識の接近・複合]

- (21) たき 亭主にやあ折ふし。真乳山で逢やす
幸 山口巴ときちやあ。聖天大信仰さ
たき どふりで。強勢に拜んでゐる所を。見かけた事がござりやした (花街鑑/1822/山口巴といえば待乳山聖天さ)

そのほか、「母人」に言及する「主題」の例(22)も見られた。

[主題・複合]

- (22) おいらが宅の母人ときちやア、モウ／＼たまらねへヨ「ナニ何所でもそうだなトいふうち… (春色梅兒譽美/1832-1833/おれの家
の母親ときたら)

4.4 幕末—明治期

明治期以降、「行為の接近」の例が、小説・落語に見られ、特に落語に多く観察され始める。(23)は「ころり」という行為が話し手に向けられる小説の

例である。(24)は「チチンチン、おーい」という発話、「三味線弾きの掛け声」が話し手に向けられる落語の例である。このような発話を受ける例は、特に落語に多く見られた。これらは動作主との共起が可能である(23)'(24)'。

[行為の接近・述部]

(23) 其手で女でも口説きやれ、随分ころりと來るであらう(五重塔/1891)

(24) チチンチン、おーいとくらあ。

おっ、何でやす、そりゃ。

三味線弾きの掛け声だ。(小言幸兵衛/1903)

(23)' 女がころりと來るであらう

(24)' 三味線弾きがチチンチン、おーいとくらあ。

5. まとめと今後の課題

近世から近代にかけての江戸・東京のトキタラを調査したところ、次のようなことが判明した。

- ①「行為の接近」：他の用法に比較して出現が遅く、近世後期に1例見られ、その後、東京落語において多く使用される。
 - ②「認識の接近」：現代語の用法と異なる点として、複数の表現を並べる例(11)も見られるが、一つの表現をうける場合も見られる((10)(15)等)。また、近世期においては述部用法が生産的であり、複合形式は近世後期から見られ始める。
 - ③「主題」用法で使用される例は、少ないながらも調査対象資料のうちのすべての時代に見られた。否定的評価にのみ傾くといった特徴は特に見られない。
- ①については、特に落語で多く使用される可能性があり、詳細については上方落語との比較が今後の課題である。②③についてもさらに広い時代の資料に当たり、調査する必要がある。今後の課題としたい。

参考文献

岩男考哲(2009)「「ときたら」文をめぐって—有標の提題文が意味すること—」『日本語文法』9-2, pp.105-121, 日本語文法学会。

岩男考哲 (2014) 「「ときたら」構文の意味と主題:提題文の体系化に向けて」『日本語文法』
14-2, pp. 101-117, 日本語文法学会.

岩男考哲 (2019) 『引用形式を含む文の諸相—叙述類型論に基づきながら』くろしお出版.

岩男考哲 (2021) 「名詞に対する「評価的」意味はどのように生じるのか—「評価的」意味
研究の更なる発展に向けて—」『名詞研究のこれまでとこれから』くろしお出版.

日本語記述文法研究会 (2009) 『現代日本語文法 5』くろしお出版.

藤田保幸 (2000) 『国語引用構文の研究』和泉書院.

森田良行・松木正恵 (1989) 『日本語表現文型』アルク.

湯澤幸吉郎 (1957) 『増訂 江戸言葉の研究』明治書院 明治書院から 1981 年に再販され
た増訂二版を使用

【使用言語資料・コーパス】

国立国語研究所 (2022) 『日本語歴史コーパス』(バージョン 2022. 3, 中納言バージョン 2. 5. 2)
<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/> (2023 年 3 月 1 日確認)

『日本国語大辞典 [第 2 版]』, JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>, (2023 年
3 月 1 日確認)

〔近世中期・後期〕

・旧体系: 岩波書店編集部 (1957-1969) 『日本古典文学大系』岩波書店

近世中期 金々先生栄花夢 [1775]・遊子方言 [1770]・辰巳園 [1770]: 旧体系 59

近世後期 I 浮世風呂 [1809-1813]: 旧体系 63/東海道中膝栗毛 [1802-1814]: 旧体系 62

近世後期 II 春色梅児誉美 [1832-1833] 旧体系 64

・上記以外の例は, 国立国語研究所『日本語歴史コーパス』の検索により得た。

後方共起: (語彙素="と" AND 品詞 LIKE "助詞%") ON 1 WORDS FROM キー AND 後方共
起: 語彙素="来る" ON 2 WORDS FROM キー WITH OPTIONS tglKugiri="" AND
tglBunKugiri="#" AND limitToMainText="1" AND limitToSelfSentence="1" AND
tglWords="30" AND unit="1" AND encoding="UTF-16LE" AND endOfLine="CRLF"

〔幕末・明治〕

滑稽本 安愚楽鍋 [1871-1872] 仮名垣魯文

東京落語

・湯屋番の鼻唄/三遊亭圓遊(初代)

・小言幸兵衛・二階ぞめき・うどんや・生酔・六尺棒/柳家小さん(三代)

- ・雷獣鍋/三遊亭小遊三(初代)
- ・専売芸者/柳家小せん(初代)
- ・千早振る/柳家小さん(三代)

小説 五重塔/幸田露伴 たけくらべ/樋口一葉 吾輩は猫である/夏目漱石 他流試合/塚原洪柿園 老壮士/内田魯庵 縁の糸/幸田露伴 投機/内田魯庵 セバストウポルの落城/嗟峨の屋おむろ(訳)/トルストイ

・上記の幕末・明治の用例は、すべて国立国語研究所『日本語歴史コーパス』の検索による。検索方法の URL は近世期と同じものである。